□1月28日礼拝説教（隅野瞳牧師短縮版）
「愛に歩む」（ヨハネの手紙Ⅱ　1～13）

長老ヨハネは愛する教会と信徒たちに手紙を送りました。ヨハネは自分が直接教えることができなくても、新しい世代のクリスチャンたちが真理であるキリストのうちに、神の国という目的地に向かって歩みを続け前進していることを知らされて、大きな喜びにあふれました。聖書において永遠に変わることのない真理とは神の愛、そして神の愛を見える形で示されたイエス・キリストです。

ヨハネは教会に御子の掟を伝えます。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」（ヨハネ13:34）キリストが人となり十字架にかかられたのは、まさに父なる神の御心に従うことでした。「御心なら、この杯をわたしから取りのけてください」すべての人の罪の裁きを負い御父と断絶される十字架の死は、御子にとって耐えがたい苦しみでした。けれども主は私たちの救いのために、御父の御心に従うことを選び、十字架に向かわれました。神の愛を受けた私たちは、一人も滅びることなく永遠の命を得るように願っておられる神の御旨を心に刻み、愛を示して生きるのです。そのためには私のうちに愛がないことを認め、主に求めることが必要です。

当時の教会には、異端の教えを持ち込む者が現われていました。彼らは見えない霊的なものを善、肉体や物質を悪とみなし、人となられた主イエスは現象としてそう見えたに過ぎないとしました。けれども主イエスが人となられ、死んでよみがえってくださったからこそ、私たちの罪は赦されました。神と共に生きる命を与えられ、愛したいと願うようになったのです。神はこの世界と私たちを慈しんでお造りになり、私たちを救うために御子を人としてお送りくださいました。

主を信じる者が直接会って語り合う時、そこには御父と御子の交わりに入れられる喜びがあります。私たちはいよいよこの交わりを大切にし、さらに多くの人をお招きしたいのです。愛に歩むとはただ自分が神と共に歩むだけではなく、ここから出て行って誰かを愛し一緒に歩き、福音を伝えることでもあります。主が私たちに御自身の愛を増し加え、愛に歩む教会として世に遣わしてくださいますように。（終）